



歴史的数値データのデジタル公開について

神戸大学 経済経営研究所
准教授 高槻 泰郎

筆者は現在、同僚の高橋秀徳先生と共同で、江戸時代の堂島米市場（諸大名の年貢米を売買した市場、先物取引も行われたことで知られる）の値動きに関する実証研究を進めている。まさに論文執筆中のため、その内容をここに書くことはできないのだが、値動きを分析している以上、米価の情報が不可欠になる。

我々が参照しているのは、堂島米市場で日々形成された米価である。肥後米（熊本藩の年貢米）、加賀米（金沢藩）、筑前米（福岡藩）などの銘柄の価格や、先物価格（当時は帳合米、と呼ばれた）の時系列データを用いて分析している。ここでさりと「日々」と書いたが、考えてみれば凄いことではないだろうか。200 年近く前の価格が、デイリーで観察できるのだから。

日々の米価を我々がデータとして利用できるのは、それを記録してくれた人がいたからに他ならない。その代表的な家こそ、近江国に居住した玉尾家である（詳細は、高槻泰郎『近世米市場の形成と展開—幕府司法と堂島米会所の発展—』名古屋大学出版会、2012 年に譲る）。富農であった玉尾家は、米相場の把握、記録に熱心で、18 世紀中頃から幕末にかけて、詳細な「相場帳」（価格のレコード）を書き残していた（国文学研究資料館所蔵「近江国蒲生郡鏡村玉尾家文書」所収）。経済史研究者にとって非常にありがたいことなのだが、ひとつ問題がある。字のクセが強い、ということである。

一般的に、江戸時代の人々が毛筆で墨書する文字には、崩し方の流儀があつて（御家流と呼ばれる）、特に数字（もちろん漢数字である）については、それほど崩しのバリエーションもないため、通常は読みやすいものである。事実、初心者向けの崩し字読解講座などでは、まずは数字から読みはじめる場合が多い。

しかし、玉尾家が残した相場帳の場合、誰かに提出するためのものではなく、あくまでも自家参照用の記録であるため、さほど綺麗に書かれていない。しかも毎日毎日、記録されているものだから、書き殴っているような時もある。

特に困るのは、漢数字の「三」と「壺」、「六」と「壺」の識別である。楷書で書けば、差は歴然だが、玉尾家の記録では、これらのペアがほとんど同じ形で書かれることがある。書いた本人も、おそらく自分でどちらを書いたか、あとで思い出せないのではないだろうか、というぐらい似ていることもある。

こうした時、どちらを採用するかについて、ある種の解釈が発生してしまう。私は自分なりの直感で「これは縦方向にシュツとしているから壺で、こっちは若干、筆が横に動いているから六」とか「これは、横方向への筆のベクトルを感じるから壺ではなく三だろう」など

というように読んでいるのだが、これが絶対に正しいという保証はどこにもない。同じ相場帳を読んで、月初の価格のみを表にして発表された鶴岡実枝子先生の論文を読んでも、「三」と「壺」、「六」と「壺」に関して鶴岡先生の判断が揺れていること、私の直感と相違することもあることが分かる（鶴岡実枝子「近世米穀取引市場としての大津―湖東農村商人の相場帳の紹介（二）―」『史料館研究紀要』第5号、1972年3月、19-209頁）。

さて、ここからが本題である。確実に読めない数字がある以上、分析の信憑性は担保されないのだろうか。筆者はそうは考えない。確かに、確定できない数字、解釈に幅のある数字は存在する。そうした場合、米価の横に「不確定フラグ」なる欄を作って、不確実性が高い場合は「1」、そうでない場合、つまりこれはほぼ確実にこの数字であろう、と自信を持って言える場合は「0」を入力しておけばよい。実際の分析に際しては、「不確定フラグ」が「1」となっている米価を除外して分析した場合と、これらを含めて分析した場合で、結果が変わるかどうかを検証すればよい。もし分析結果が大きく変わらないのであれば、分析の信憑性は保たれていると考えることができる。必要であれば、6と3、3と1を入れ替えて分析してみることも可能である。

紙の上でデータを発表した場合、上記の「六」と「壺」、「三」と「壺」の問題が、利用者には認識されなくなる。論文や本に63匁6分と書いてあれば、利用者は63.6とエクセルなどに入力することになる。本当は63匁1分の可能性もあるのに、である。もちろん、原史料（玉尾家によって書かれた相場帳）に辿れば、検証は可能だが、そこまで遡及する人は少数派であろう（今のところ、玉尾家の相場帳にアタックした人類は鶴岡先生と私だけである）。

従来、歴史的な数量データは「紙」の上にまとめられて出版されることが一般的であった。そのため、我々後進の研究者が、これをデータとして使うときには、電子データとして打ち込むコストを支払ってきたわけだが、現在は最初から電子データの形で公開することも可能である。否、そうしなければならぬ状況になってきている。学術雑誌によっては、分析に使用したデータを、誰でもアクセスできる形で、デジタルデータとして公開することを義務づけるところもあるし、2025年度応募分より、科学研究費補助金などの公的資金を受けて行われた研究については、成果として得られた査読付き学術論文及び根拠データの公開が義務づけられることになったため¹、今後、歴史的な数量データが電子的に公開される機会は増えてくるであろう。

そういう場として、神戸大学計算社会科学研究センターのヒストリカルデータベースを活用して欲しい（<https://ccss.kobe-u.ac.jp/research/database/index.html>）。現在、近世・近代日本の歴史的な数量データが公開されているが、今後、拡充していきたいと考えている。論文で使用したデータの公開を検討されている方は、上記センターに連絡して頂きたい。

¹ 「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」（2024年2月16日、統合イノベーション戦略推進会議決定、https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf、2025年2月9日閲覧）。